

恐慌論ノートー従前の恐慌と「コロナ恐慌」の違いについて

1、古典派経済学

マルサスー生産の消費以上の大超過＝貯蓄と資本蓄積の課題と有効需要の不足、蓄積と生産誘因の終了。再生産の外部、有効需要不足から。

リカードー富の増大、資本蓄積の停滞は、労賃の上昇に基づく利潤率低下・利潤の減少による貯蓄と資本蓄積の減少・停滞による。ー利潤(資本家)と労賃(労働者)との対抗関係から。

* いずれも恐慌の周期的発現についての解明には至らない

2、マルクス資本論 19世紀イギリス資本主義の産業循環を対象に

資本論ー恐慌発生の原理的必然性を説明。資本と賃労働との対立・基本的矛盾、資本の有機的構成の高度化と利潤率低下、相対的過剰人口形成、利潤率と利率との対抗関係、産業循環と固定資本、再生産と部門間不均衡、*資本の絶対的過剰・資本価値の破壊

* 第3巻第3篇 利潤率の傾向的低下の法則 第15章 この法則の内的矛盾の展開

3、資本論以降 類型 強調点 19世紀末～20世紀

1)商品過剰論ー需要に対する商品供給の過剰。

ー利潤率低下と資本の過剰はその結果である。

A 生産部門間の均衡の破壊ーツガンバラノフスキー、ヒルファーディング、

B 労働者消費の相対的縮小・過少消費説ーカウツキー、ブハーリン、

2)資本過剰論ー利潤率低下と資本の過剰蓄積、資本蓄積の停止

ー商品の一般的供給過剰はその結果と現象である。

A 利潤率低下要因に労賃上昇を想定ーバウエル、スウィージー

B 資本の有機的構成高度化によるープライザー、グロスマン、ドップ、

4、恐慌史

1)産業資本主義以前ー 17、18 C 英中心に

- 1634-37 オランダフェリックス投機
- 1640 預託現金差押えパニック
- 1667 対オランダ戦争
- 1672 同上 国庫債務支払停止
- 1696 鑄貨改革 流通手段逼迫
- 1708 風評信用混乱
- 1719-20 仏ジョノロー株式投機
- 1720 南海会社 国債株式投資
- 1745 王位復辟暴動ロントンパニック

貨幣ー投機ー信用恐慌 経済外的要因

- 1763 七年戦争終結投機
- ハンブルグ商業恐慌
- 1772 投機恐慌
- 1778 アメリカ植民地戦争
- 1783 同上終結 貨幣銀行・恐慌
- 1793 対仏戦争 商工業突発高揚
- 1797 アイラントパニック 仏侵入
- 1799 ハンブルグ商業恐慌

2) 19 C 周期的恐慌

- 1810 大陸封鎖 商品投機 商館破産
- 1815 ナポレオン失脚 綿業過剰生産
- 1819 投機的輸出 物価暴落
- * 1825 新産業(鉄道・ガス・鉱山・運河) 輸出拡大 企業投資 金流出 最初の周期的世界恐慌
- 1836 アメリカ鉄道・運河・銀行新設 英企業濫設 貸付原料価格高騰 金流出
- 1839 貨幣恐慌 ベルギーーアメリカ銀行精算 金流出

- 1847 新鉄道建設 製鉄・木綿工業 中国市場 鉄道投機 貨幣恐慌 ヨーロッパ全体へ
- 1857 米・独・仏、鉄道他産業高揚 過剰生産恐慌 米から英・ヨーロッパに拡大 世界恐慌
- 1866 信用恐慌 米奴隷制廃止・内戦 綿花飢饉
- 1873 ドイツ重工業発展、英・米鉄鋼業高揚 慢
- ～ 79 世界恐慌 繊維工業から重工業へ 性
- 1882-86 不
- 1891-93 況

3) 独占資本と恐慌の形態変化ー慢性不況へ

1873 年恐慌以降ー独占とカルテルの形成、信用制度整備、商品・証券投機性の減退・制限

1900 〃 ードイツ・重工業大企業・大銀行が独占体に再編・統合、イギリス・トラスト

1907 〃 ー

* ヒルファードィング「金融資本論」第4篇「金融資本と恐慌」1910 産業の銀行への依存

レーニン「帝国主義論」1917 ①独占の形成、②大銀行と大企業の融合、③金融資本と金融寡頭制、④資本の過剰と資本輸出、⑤資本家団体の世界分割、⑥列強の世界分割、⑦資本主義の不均等発展と帝国主義戦争、⑦帝国主義の寄生性と腐朽性

1914～18 第1次世界大戦 1917 ロシア革命

1923 世界恐慌 1927 日本金融恐慌 1929.10 ウォール街株大暴落

1931 9.満州事変 1932.7 ナチス第1党へ 1939.9 ドイツ、ポーランド侵攻 第2次世界大戦

1949.10 中華人民共和国、ドイツ民主共和国成立 社会主義圏の拡大

5、国家独占資本主義と現代

1) 戦後恐慌 A 国際協調ー恐慌発現の回避・避難 B 一方での過剰資本とバブル経済化

1971 ニクソンショック 金ドル交換停止、変動相場制へ

1973～石油ショック 1979 第2次石油ショック 世界同時不況

1980年代 バブル景気 20世紀末ソ連東欧崩壊

1991～2003 日本・バブル崩壊・平成不況

2008.10 アメリカ・リーマンショック

2) 展望ーポスト資本主義

①低成長の常態化 ②人口減 ③地球温暖化 ④資本増殖の限界

世界史の引き金となってきたパンデミック（世界流行）

歴史上、もっとも多くの死者を出したパンデミックを抽出。

1、 HIV ウイルス 約 3,000 万人死亡（20 世紀～現在）

HIV ウイルスは 1970 年代後半に世界的に拡大し、1981 年にエイズが発見されました。2015 年段階で約 3,670 万人が HIV ウイルスに感染しています。95% の患者が発展途上国の人で、性交渉や親子感染、汚染された血液の注射によって感染します。先進国では主に、薬物の薬を打つ注射の使い回しや同性間での性交渉による感染が多くなっています。

HIV はもともと霊長類を宿主とするサル免疫不全ウイルスで、それが突然変異によってヒト免疫不全ウイルスに変異したと考えられています。どのような経緯で現れたかは様々な説がありますが、最も有力なものが 1930 年代のアフリカ中部で、サルを食べたチンパンジーがウイルスに感染して混種ウイルスが形成され、そのチンパンジーの肉を食べた人に伝染し広がったというもの。

HIV ウイルスを完治させる治療法・治療薬はまだ見つかっておらず、治療によってウイルス量を抑え続けるしか方法はありません。

2. アジアかぜ 約 200 万人死亡（1957 年～1958 年）

1957 年に始まったアジアかぜもインフルエンザで、2 月下旬に中国から流行が始まり、4 月に香港、5 月にシンガポールと日本に上陸。10 月には世界中で症例が確認されました。熱帯の国と日本では上陸と同時に一気に流行しましたが、欧米では侵入後潜伏期間があり 6 週間後に一気に広がりました。

スペインかぜよりは致死率は低かったものの、児童と高齢者を中心に爆発的な感染が起こり、世界中で約 200 万人が死亡しました。ワクチンがアメリカで 8 月、イギリスで 10 月、日本では 11 月に利用可能になりましたが、生産量が非常に少なく、学級閉鎖が伝播を防止できる唯一の手段でした。

3. スペインかぜ 約 4,000 万人死亡（1918 年～1920 年）

史上流行したインフルエンザで最も甚大な被害を出したのが、通称「スペインかぜ」。

第一次世界大戦中の 1918 年にアメリカから流行が始まり、患者数は世界人口の 25～30% で、致死率

は2.5%以上、死亡者数は全世界で4,000万、一説には1億人ともいわれています。

1918年3月にアメリカから第一波が起こり、1919年はじめまでに三回の大流行が発生。通常は児童や老人に死亡が多いですが、この時は15～35歳の青年層が最も被害を受け、死亡者の99%が65歳以下でした。当時はインフルエンザウイルスの存在は知られておらず、当然ワクチンなど存在しないため、有効な手立てはなく、学級閉鎖や移動の禁止、マスク着用の義務化などで対応せざるを得ませんでした。日本も例外でなく、約2,300万人の患者と約38万人の死亡者が出たと報告されています。

4. 第三次コレラ流行 約100万人以上が死亡（1846年～1860年）

コレラのパンデミックは史上七回発生しています。第三次コレラ流行は19世紀半ばに発生したパンデミックで、発生源はインドのガンジス川デルタ地帯。世界的流行によりロシアでは約100万人が死亡、ロンドンでも約2万人が死亡しました。この流行による世界中での正確な人数はよくわかりません。おそらく100万人は確実に超えていると思います。

19世紀後半から20世紀前半は、世界的なヒトとモノの流通量が飛躍的に増大し、グローバル化が一段と進んだ時代でした。大英帝国との経済的な繋がりを深めたインドで、世界各地からヒトやモノ（特に家畜）が流入してきたことで大きな被害が出るようになったのでした。ロンドンで流行した。

1854年、疫学の父と言われるジョン・スノウ博士の貢献により、病気の媒介が汚染された井戸水によることが突き止められました。これがきっかけでロンドンでは大規模な上下水道システムの整備が進み、公衆衛生の安全性が高まりました。

(4). 第三次ペスト流行 約1,200万人死亡（1855年～年）

第三次ペスト流行は、過去世界で壊滅的な被害を与えてきた腺ペストの大流行で、1855年に清帝国の雲南地方から始まりました。当時の雲南では鉱山開発により漢人が大量に流入し回族との軋轢が生じており、物流の増加の中でネズミが媒介する腺ペストが流行。危機が高まり、回族が反漢・反清の反乱（パンゼーの乱）を引き起こしました。回族の反乱は太平天国の乱とも連動し、清帝国の支配を揺るがすこととなります。さらに腺ペストは広東、香港、そしてインドにもたらされ、インドだけで1,000万人が死亡しました。

5. 明末大疫病ペスト 約4,000万～5,000万死亡（1641年～1644年）

明帝国の息の根を止めたのは李自成の軍ですが、そのきっかけを作ったのはペストの大流行でした。地球は小氷河期に突入し、中国では作物の不作が長年続き、いなごやネズミの大量発生が起き、人々は十分に食えなくなり、体が弱っている所にネズミが媒介するペストが発生しました。干ばつ、飢餓、ペストにより人々は餓死、病死、自殺していきます。さらには内乱などによって多くの人々が殺され、当時の中国の人口は約1億人でしたが、この危機により約4,000万人が死亡したとされています。

首都北京でも住民の約1/4が死亡、北京を守る兵も半分が死に、モンゴル北方を守る3つの大隊も壊滅。馬も大半が死亡して機動力は失われ、兵たちはただ身を横たえるのみ。この混乱に乗じて、北の満州族をはじめ各地で反乱が相次ぎ、その中で李自成が各勢力に先んじて北京を落とし、明帝国を追放しました。

6. アメリカ先住民疫病死 数千万人規模で死亡（16世紀半ば）

スペイン人が新大陸に上陸した後、原住民の多くがスペイン人が持ち込んだ疫病によって死亡したことはよく知られています。当時の新大陸の原住民の人口がよく分かっていないこともあり、どれくらいの人々が死んだかあまりよく分かっていません。アステカ帝国の中央メキシコの人口は、1548年に603万人あったのが1608年には107万人に減ったと推定されています。コルテスらがやってきたのは1519年だったので、おそらく1519年から1548年の減少数はもっと多かったはずですが、新大陸全体で、超ざっくり、数千万人は死んだであろう、とされています。新大陸はいわゆる「疫病の処女地」であり、人々にユーラシア大陸で史上猛威を振るってきた疫病に対する免疫がなく、天然痘、はしか、チフス、インフルエンザといった「ごく一般的」な疫病によって次々と倒れていきました。

原住民の人口が激減したことで、新大陸では労働力が足りなくなり、プランテーション農園や鉱山の資本家は西アフリカから奴隷を連れてきて働かせることになり、今度は大量の人々が連れ去られたアフリカの荒廃を起こすこととなります。

7. 黒死病 約 7,500 万～2 億人死亡 (1346 年～ 1353 年)

「黒死病」は感染すると皮膚に黒い斑点がつくから英語で「Black Death」と呼ばれ、それが日本語に直訳された名称ですが、つまるところペストです。

1347 年に黒海に面する商業都市カフファで発生し、またたくまにヨーロッパ全体を覆い尽くし、当時のヨーロッパの人口の 1/3 が死亡したとされ、死者数は全世界で 7,500 万人から 2 億人とまで言われています。

黒死病の流行の背景には、モンゴル帝国のユーラシア大陸制覇による物流革命があったとする説があります。モンゴル軍がペストが風土病となっていたミャンマーを攻めた時に感染して中央アジアに持ち帰り、そこから中国本土でペストが流行り、その後東西交易の中で中国から黒海へと渡って、それがヨーロッパ中に広まったというものです。

ペストの病原菌はネズミが媒介し、その病原菌をネズミに寄生するノミが人間に感染し発症します。ユーラシア東西交易の物流の中にペスト菌に感染したネズミが紛れ込んでいたか、ペストを媒介したノミがいたことは十分にありえます。

ユーラシア全体でのペストの流行は、かねてより小氷河期に入って干ばつが続き食糧不足にあえいでいた各地に大打撃を与え、モンゴル帝国の支配は弛緩して地方の分権化と独立が進んでいきます。中国では元がモンゴル高原に追われて明が誕生することになります。

8. 天平の疫病 約 150 万人死亡 (735 年～ 737 年)

天平 9 年 (737 年)、奈良時代の日本で天然痘が大流行しました。おそらく中国か朝鮮の使節が持ち帰って広まったもので、当時は地震・凶作などが相次ぎ、多くの人の体力が弱っていたと考えられ、追い討ちをかけた疫病によって 150 万人が死亡したと考えられています。

猛威を振るう天然痘は、当時の権力者・藤原四兄弟 (武智麻呂、房前、宇合、麻呂) を全員病死させ、その影響で政治機能が一時的に麻痺し、その後聖武天皇を中心に橘諸兄などによる皇親政治が始まり、その後、武智麻呂の子・仲麻呂の巻き返しが起こるなど政局が混迷していきます。奈良の大仏が建立されるのはこうした世の中の混迷の延長線上にありました。

9. ユスティニアヌスのペスト 約 2,500 万人～約 5,000 万人死亡 (6 世紀)

542 年～ 543 年、ユスティニアヌス一世治下の東ローマ帝国で腺ペストが大流行しました。ペストは帝国の領土に広範囲に広がり、隣国のササン朝ペルシアやイタリア半島、北アフリカにも波及。60 年にも渡って猛威を振るい続けたと言います。ユスティニアヌス自身も感染しますが、辛くも命は取り留めました。

しかし人口の大減少は経済に壊滅的な被害を与え、ユスティニアヌス以降の東ローマ帝国の衰退のきっかけになったと言われています。定説によると、ユスティニアヌスのペストによる死者数は 2,500 万～ 5,000 万と言われてきました。これは古代の人口からするととんでもない数です。

一方で最新の研究によると、ユスティニアヌスのペストは当時のヨーロッパ社会を揺がすほどの深刻なダメージはないらしく、過大評価だと見る向きもあります。